

## 第5章 社会人・地域住民の立場からみたキャリア教育

本調査票では、「社会人」としての立場からの回答も求めている。本節では、「社会人」としての立場から、①社会に出てくる若者にどんな能力・資質を求めているか、②それらの能力・資質をどこで育成すべきか、③「キャリア教育」にどの程度関わることができるかの3点について検討する。

また、本章後半部では、「地域住民」としての立場からの回答について分析する。「地域住民の立場」から、①子どもの将来に向けた地域の取り組みにどの程度関わることができるか、②地域住民として何ができるか、③仮にどのような条件整備がなされれば関わることができるか、④今後は地域にどのような仕組みが必要かの4点について検討する。

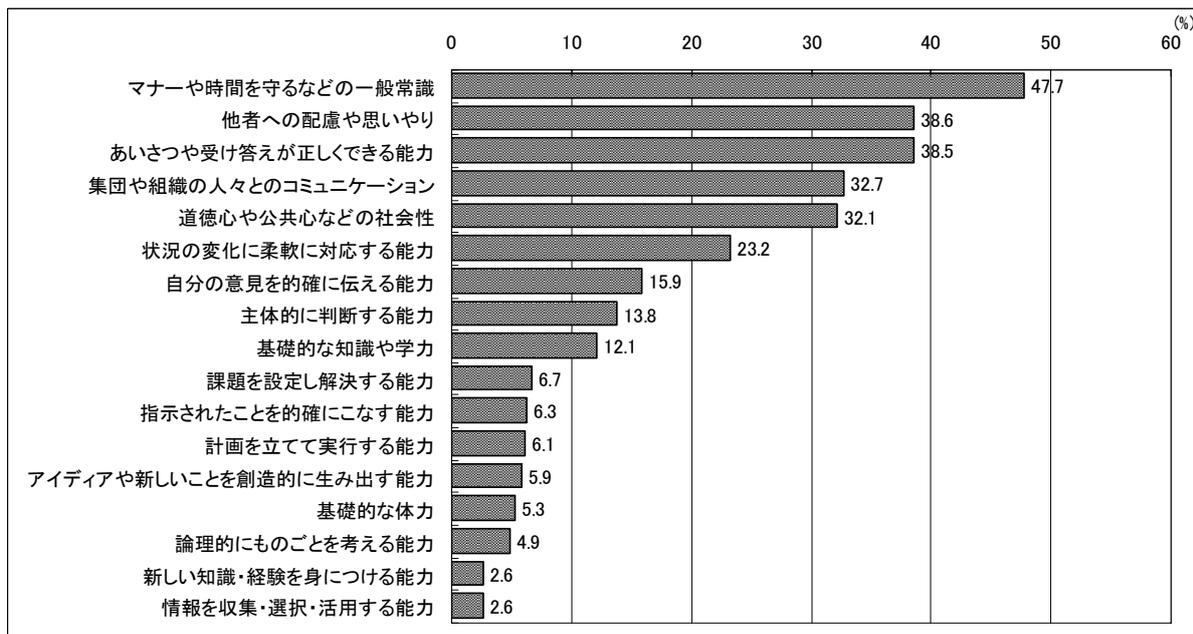
### 1. 社会に出てくる若者にどんな能力・資質を求めているか

図表5-1は、社会に出てくる若者に求める能力・資質のうち、最近特に不足していると思われるものを3つ選んでもらった結果である。もっとも多いのは、「マナーや時間を守るなどの一般常識」(47.7%)である。今の世相を反映してか、今日の若者に不足している能力・資質がトップに挙がっている。次に、「他者への配慮や思いやり」(38.6%)、「あいさつや受け答えが正しくできる能力」(38.5%)、「集団や組織の人びととのコミュニケーション」(32.7%)のコミュニケーション能力を挙げている。「挨拶や受け答え」はコミュニケーションの基本であり、「他者への配慮や思いやり」はコミュニケーション能力のうち高度な成分である。これらを兼ね備えてこそ、「集団や組織の人々とのコミュニケーション」が可能になる。社会人は、現代の若者がこのコミュニケーション能力不足と判断しているといえる。若者のコミュニケーション能力の不足は、他の調査でも同様な結果が出ており、現代若者への警鐘ともいえる。

逆に少ないのは、「情報を収集・選択・活用する能力」(2.6%)、「新しい知識・経験を身につける能力」(2.6%)である。これらは、社会に出て実際に仕事をしながら身につけていく能力と考えているのであろうか。しかしこれらの「情報収集活用能力」や「知識獲得能力」は一朝一夕では身につかず、学校教育できちんと開発されるべき能力である。

また、社会に出てくる若者に求める能力・資質と年齢別・性別・学歴別・世帯年収別に見てみると、次のような結果が示された。

年齢が高いほど、「基礎的な知識や学力 ( $r=-.12$ )」を求めており、年齢が低いほど「集団や組織の人々とのコミュニケーション ( $r=-.12$ )」を求めていた。性別では、男性より女性が、また学歴や年収の低いほうが、「マナーや時間を守るなどの一般常識 (性別:  $r=.12$ 、学歴  $r=-.14$ )、年収  $r=-.11$ )」を求めていた。そして学歴が高いほど「主体的に判断する能力 ( $r=.13$ )」「課題を設定し解決する能力 ( $r=-.11$ )」を求めていた。



図表5-1 社会に出てくる若者に求める能力・資質

この結果から、年齢によって若者に基礎学力、コミュニケーション能力を求める程度が異なること、学歴が高いほうが判断力や課題解決能力などの抽象的な能力を求めていること、「一般常識」は女性のほうが重視しており、さらに学歴や年収が低いほうが重視していることがわかった。

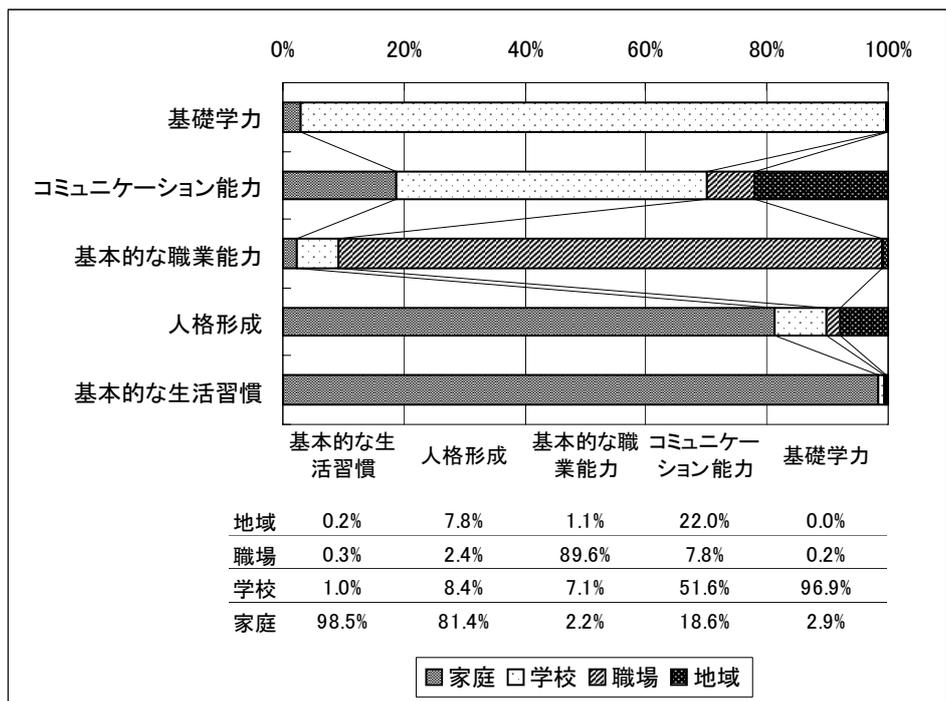
図表5-2は、それぞれの職種の人が他の職種に比べ、より多く不足している能力・資質をあげたものである。この図表から各職種がどの能力・資質を求めているかがわかる。専門・技術的職業では、特に「論理的に物事を考える能力」、「課題を設定し解決する能力」が求められている。専門・技術的職業には、論理思考能力、問題解決能力、柔軟対応能力が特に必要なことを裏付けている。管理的職業では、特に、「集団や組織の人々とのコミュニケーション」、「計画を立てて実行する能力」が突出している。管理的職業には、やはりコミュニケーション能力や計画立案実行能力が必要とされるのであろう。事務的職業では、「主体的に判断する能力」が群を抜いていた。販売・サービス業では、「マナーや時間を守るなどの一般常識」、「他者への配慮や思いやり」、「挨拶や受け答え」を求めている。生産工程・建設業では、「他者への配慮や思いやり」であった。それぞれの職種により、その特徴がよく現れている。特に、販売・サービス業では、その特徴が顕著である。この職種は、チームワークによる顧客相手の仕事であり、マナーや時間を守るなどの一般常識をはじめ、「挨拶や受け答え」「他者への配慮や思いやり」などのコミュニケーション能力が必要とされる。

図表5-2 職種別にみた若者に求める能力・資質

職 種	社会に出てくる若者に求める能力・資質
専門・技術的職業	「論理的に物事を考える能力」「課題を設定し解決する能力」「状況の変化に柔軟に対応する能力」
管理的職業	「集団や組織の人々とのコミュニケーション」「基礎的な知識や学力」「計画を立てて実行する能力」「課題を設定し解決する能力」
事務的職業	「主体的に判断する能力」
販売・サービス業	「マナーや時間を守るなどの一般常識」「他者への配慮や思いやり」「挨拶や受け答え」
生産工程・建設業	「他者への配慮や思いやり」

## 2. それらの能力・資質をどこで育成すべきか

図表5-3は、若者の資質・能力の形成をどこで行うべきかを尋ねた結果である。家庭では「基本的な生活習慣」と「人格形成」、学校では「基礎学力」と「コミュニケーション能力」、職場では「基本的な職業能力」を形成すべきという当然の結果になった。地域社会では「コミュニケーション能力」の形成に一翼を担うべきと考えているといえる。



図表5-3 若者の能力・資質を育成する主体

## 3. 「キャリア教育」にどの程度関わることができるか

一方、職場で学校教育における「キャリア教育」に対して何らかの形で関わることができるかを尋ねたのが、図表5-4である。「どちらとも言えない」(51.2%)が多く、内容が漠然としているだけに、どう関わったらいいのかわからないため、「どちらとも言えない」となったのであろう。

図表5-4 職場で「キャリア教育」にかかわる可能性

できる	18.6%
どちらとも言えない	51.2%
できない	30.2%

そこで、何らかの形で職場で働いている人に、具体的に職場体験学習や職場見学などの申込みがあった場合をどの程度受け入れることができるかを尋ねた。その結果が、図表5-5である。やはり「どちらとも言えない」と「その時にならないとわからない」を合わせると、40.8%になり、4割の人が態度保留にしている。一方、「積極的に受け入れることができる」と「少し受け入れることができる」の受け入れ可能性を示唆した人の割合は4割弱で、逆に受け入れに否定的な人は2割に達している。態度保留の人が4割もいる結果は、具体的な職場体験にしる職場見学にしる、受け入れた経験がないためである（図表5-5参照）。

図表5-5 「キャリア教育」の受け入れ程度

1 積極的に受け入れることができる	14.8%
2 少しは受け入れることができる	23.6%
3 どちらとも言えない	23.1%
4 あまり受け入れることができない	11.5%
5 全く受け入れることができない	9.4%
6 その時にならないとわからない	17.7%

図表5-6は、過去に職場で中学生の職場体験を受け入れの有無が、学校教育におけるいわゆる「キャリア教育」に対しての関わりの可能性にどう考えているかを示したものである。この数字は、無回答と不明を除いた数とその割合である。なぜ無回答と不明を除いたかという、なぜ回答しなかったのか、また不明もその理由がわからなかったからである。この図表から、学校教育におけるいわゆる「キャリア教育」に対して「できる」は、受け入れ経験のある人で39.6%、受け入れ経験のない人で14.0%であるということがわかる。

さらに図表5-7は、同様に過去に職場で中学生の職場体験を受け入れの有無が、具体的に「キャリア教育」に関連する職場体験学習や職場見学などの申込みがあった場合、どの程度受け入れることができるかを尋ねた結果である。この図表も無回答と不明を除いた。理由は図表5-6の場合と同様である。この図表からわかるように、受け入れ経験のある人は、「積極的に受け入れることができる」と「少しは受け入れることができる」の合計率が、なんと73.3%である。経験のない人に比べると、受け入れ可能が圧倒的に多いことがわかる。このことは、受け入れの経験のある人は、受け入れの可能性を示唆している。逆に、受け入れの経験のない人は、具体的なイメージができないため、「どちらとも言えない」(25.3%)と「わからない」(20.7%)の比率が高くなっているといえる。

図表5-6 過去の職場体験の受け入れの有無と  
いわゆる「キャリア教育」に対する関わりの可能性

		キャリア教育に関わる可能性			合計
		できる	どちらとも言えない	できない	
過去の職場体験の受け入れの有無	ある	78 39.6%	97 49.2%	22 11.2%	197 100.0%
	ない	118 14.0%	440 52.1%	286 33.9%	844 100.0%

※欠損値を含むため、合計の値は図表5-7と異なる。

図表5-7 過去の職場体験の受け入れの有無と  
いわゆる「キャリア教育」に対する受け入れの程度

		キャリア教育の受け入れの程度					合計	
		積極的に受け入れることができる	少しは受け入れることができる	どちらとも言えない	あまり受け入れることができない	全く受け入れることができない		その時に分からない
過去の職場体験の受け入れの有無	ある	81 39.3%	70 34.0%	30 14.6%	11 5.3%	4 1.9%	10 4.9%	206 100.0%
	ない	74 1.8%	177 20.9%	214 25.3%	110 13.0%	95 11.2%	175 20.7%	845 100.0%

※欠損値を含むため、合計の値は図表5-6と異なる。

#### 4. 社会人の立場からみたキャリア教育のまとめ

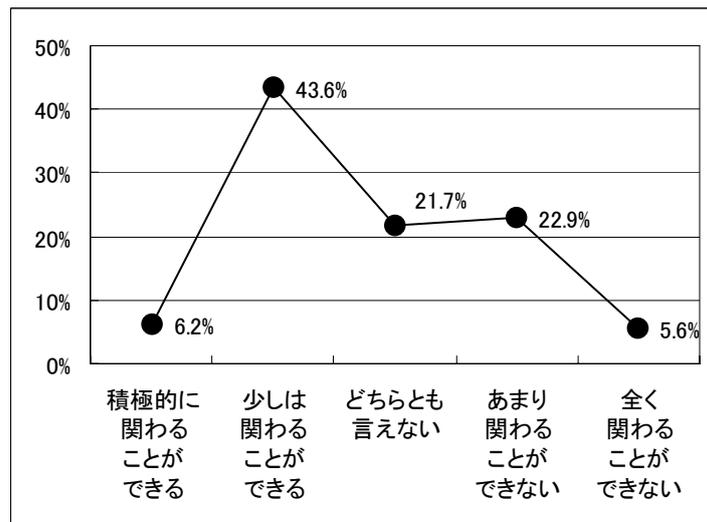
社会人の立場から社会に出てくる若者に求める能力・資質は、次の3点にまとめることができる。すなわち、①「一般常識」②「道徳心や公共心などの社会性」、そして③「コミュニケーション能力」である。この「コミュニケーション能力」には、基礎的な「挨拶や受け答えが正しくできる能力」から高度な「他者への配慮や思いやり」「自分の意見を的確に伝える能力」が含まれている。また、職種によって、若者に求める能力・資質が違っていた。

そして、過去に職場体験を受け入れた経験のある者は、これらの能力を育成するのに関わることをやぶさかではないとしている。このことは、学校はもちろん、家庭や地域ぐるみで若者の資質・能力の育成を可能にすることを示唆している。

#### 5. 地域住民の立場からみたキャリア教育

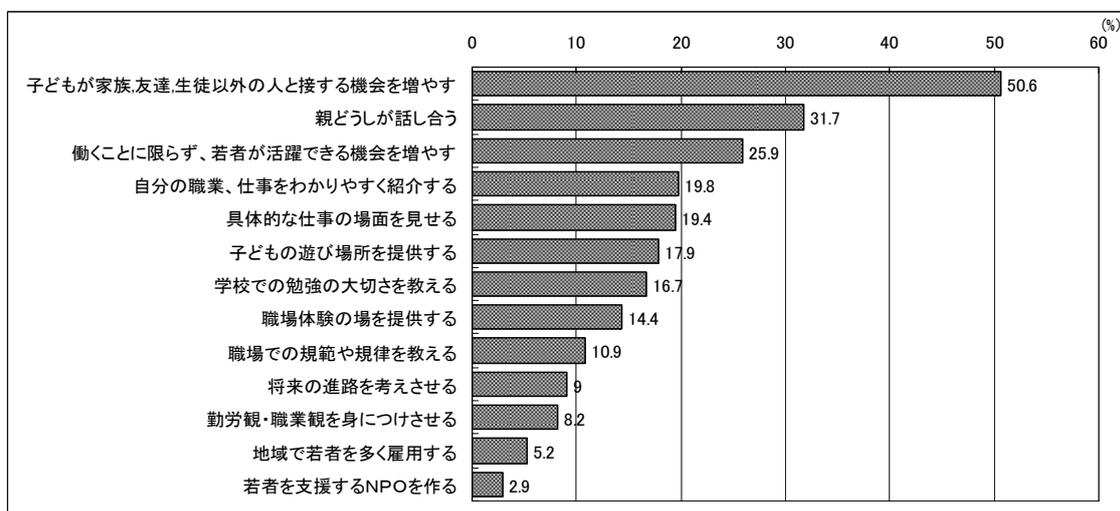
##### (1) 地域住民としてのキャリア教育に対する関与

ここからは地域住民としての立場からみたキャリア教育について検討を行う。本調査から「現状で、地域の子どもの将来に向けた取り組みに対して、地域住民としてあなたはどの程度関わることができますか。」という設問に対する回答を図表5-8にまとめた。その結果、最も多い回答は「少しは関わるができる(43.6%)」であり、以下「あまり関わるができない(22.9%)」と「どちらとも言えない(21.7%)」が同じような値となっていた。



図表5-8 地域住民としてのキャリア教育に対する関わり

地域住民としてキャリア教育に対して少しは関わる事ができるという回答が多かったが、おもにどのような取り組みに対して関わる事ができていると考えているのだろうか。本調査から「地域の子どもの将来に向けた取り組みに対して、あなたは地域の住民として何ができるとお考えですか。」という設問についての回答を図表5-9にまとめた。図表5-9は、以下に挙げた様々な取り組みに対する複数回答の結果を図示したものである。



図表5-9 地域住民としてキャリア教育に関与できること

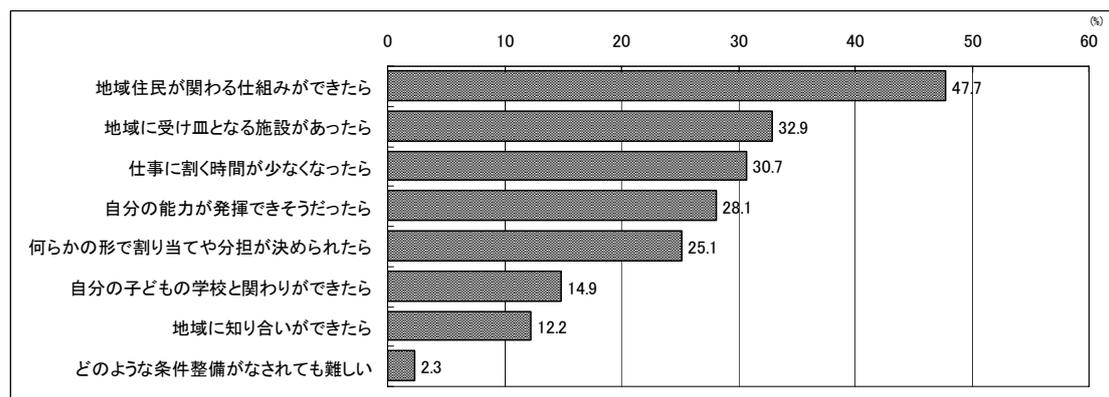
図表5-9から、「子どもが家庭、友達、生徒以外の人と接する機会を増やす（50.6%）」が最も多い。以下、「親どうしが話し合う（31.7%）」「働くことに限らず、若者が活躍できる機会を増やす（25.9%）」と続いている。こうした結果から、何らかの形で子どもが普段接する人以外と接することができるようにしたいと考え、親どうしも話し合う必要があるとし、若者が活躍できる機会を増やすというということにも肯定的な回答が寄せられていると言え

る。しかし、一方で、抽象的な内容の取り組みに回答が集中している面が多く、実際に具体的に取り組むとなった場合、障壁も多いこともうかがえる結果となっている。

## (2) 地域住民としてキャリア教育に参画するための条件整備

それでは、どのような条件が整えば、地域住民として若者に対する取り組みに具体的に関わることができると考えられているだろうか。本調査から「仮にどのような条件が整ったら、地域の子どもの将来に向けた取り組みにあなたは地域住民として関わることができますか」という設問に対する回答を図表5-10にまとめた。図表5-10は以下に挙げた項目に対する複数回答の結果を整理したものである。

図表5-10から、「地域住民が関わる仕組みができれば（47.7%）」という回答が最も多く、以下、「地域に受け皿となる施設があったら（32.9%）」「仕事に割く時間が少なくなったら（30.7%）」と続いている。こうした結果から、若者に対する地域住民としての取り組みは、仕組み、受け皿、時間の面で条件整備がなされれば多少なりとも行いやすくなる可能性がうかがえる。

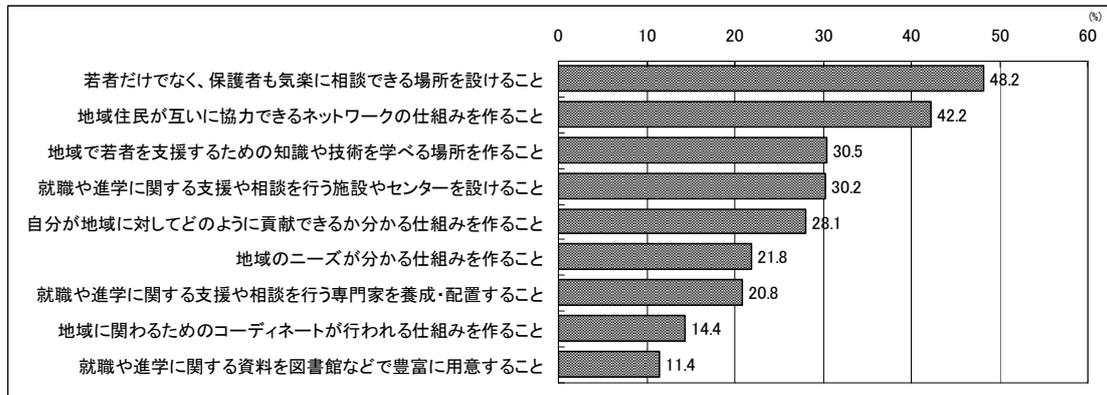


図表5-10 地域住民としてキャリア教育に参画するための条件整備

具体的にどういう仕組みが必要かについても本調査ではたずねた。本調査から「これからの若者や子どものために、地域にはどういう仕組みが必要ですか」という回答を図表5-11にまとめた。図表5-11は複数回答の結果を整理したものである。

図表5-11から、「若者だけでなく、保護者も気楽に相談できる場所を設けること（48.2%）」の回答が最も多く、以下、「地域住民が違いに協力できるネットワークの仕組みを作ること（42.2%）」「地域で若者を支援するための知識や技術を学べる場所を作ること（30.5%）」「就職や進学に関する支援や相談を行う施設やセンターを設けること（30.2%）」などが続いている。基本的に、地域住民としての立場から若者を支援するにあたって、まず先に保護者どうしのコミュニケーションの場、ネットワーク作りの仕組みが求められていることがうかがえる。また、地域住民として若者に対する支援を行う役割を担いたいと考えつ

つも、そのための知識や技術を学べる場所が求められているとも考えられる。ネットワーク、場所、センターが地域住民としてのキャリア教育を考える上で重要なキーワードとなってくると考えられよう。



図表5-11 地域住民としてキャリア教育に参画するために必要な仕組み

### (3) 地域住民の立場からみたキャリア教育と性別年齢との関連

地域住民の立場からみたキャリア教育に対する保護者間での相違を検討するために、性別・年齢による違いを分析した。

その結果、地域住民としてキャリア教育に関与できることは、年齢よりも、むしろ性別によって違いみられていた。すなわち、父親である男性は、「勤労観・職業観を身につけさせる」「具体的な仕事の場面を見せる」「職場での規範や規律を教える」「自分の職業、仕事をわかりやすく紹介する」といった、直接、職業や仕事に関わるような側面でキャリア教育に関与できると考えていた。一方、母親である女性は、「親どうしが話し合う」「子どもが家族、友達、生徒以外の人と接する機会を増やす」など、親や子どもの相互のコミュニケーションに関する側面でキャリア教育に関与できると考えていた。

図表5-12 地域住民としてキャリア教育に関与できることの性別年齢による違い

	30代 男性 (N=235)	30代 女性 (N=216)	40代 男性 (N=233)	40代 女性 (N=227)	50代 男性 (N=234)	50代 女性 (N=227)	sig.
職場体験の場を提供する	12.8%	13.0%	18.0%	14.1%	15.0%	13.7%	
勤労観・職業観を身につけさせる	7.7%	3.7%	9.9%	7.0%	15.4%	5.3%	**
具体的な仕事の場面を見せる	23.8%	17.6%	24.5%	12.8%	23.1%	14.1%	**
職場での規範や規律を教える	12.8%	4.2%	15.0%	5.3%	16.2%	11.5%	**
将来の進路を考えさせる	8.1%	9.3%	7.7%	7.5%	14.1%	7.5%	
学校での勉強の大切さを教える	16.6%	13.4%	16.3%	17.2%	20.9%	15.4%	
子どもの遊び場所を提供する	19.6%	31.5%	18.0%	15.0%	11.5%	12.3%	**
親どうしが話し合う	31.5%	40.7%	27.5%	37.4%	20.5%	33.5%	**
若者を支援するNPOを作る	3.8%	0.0%	3.4%	1.8%	3.8%	4.4%	**
地域で若者を多く雇用する	4.7%	1.4%	3.0%	7.9%	6.4%	7.9%	**
働くことに限らず、若者が活躍できる機会を増やす	24.7%	25.9%	17.6%	26.0%	29.9%	31.3%	
子どもが家族、友達、生徒以外の人と接する機会を増やす	51.5%	60.6%	37.8%	53.3%	46.2%	55.1%	**
自分の職業、仕事をわかりやすく紹介する	25.1%	11.6%	28.3%	14.1%	27.4%	11.0%	**

\*\* p<.01

その他、大まかな傾向としては、年齢が高い50代で「若者を支援するNPOを作る」「地域で若者を多く雇用する」といった直接的な支援に関わることができるとする回答が多く、小さい子どもをもつ母親が多く含まれる30代女性では「子どもの遊び場所を提供する」といった回答が多くなっていた。

次に、地域住民としてキャリア教育に参画するための条件整備について性別年齢による回答傾向の違いを検討した。その結果、まず「仕事に割く時間が少なくなったら」では父親である男性の方で回答が多かった。「地域に受け皿となる施設があったら」「地域住民が関わる仕組みができたなら」では、母親である女性の方が回答が多く、また、年齢が高くなるにつれて回答が多くなっていた。

その他、「地域に知り合いができたなら」では30代女性の回答が多く、「自分の子どもの学校と関わりができたなら」では年齢が若いほど回答が多かった。両者を考え合わせると、子どもが大きくなって学校に通うようになり、地域に知り合いができるなどの結びつきができたなら地域住民としてキャリア教育に関わると考えていると解釈できる。学校が、地域住民としてキャリア教育に関わる際の1つの要となっているとも言えるだろう。

**図表5-13 地域住民としてキャリア教育に参画するための条件整備に関する性別年齢による回答傾向の違い**

	30代 男性 (N=235)	30代 女性 (N=216)	40代 男性 (N=233)	40代 女性 (N=227)	50代 男性 (N=234)	50代 女性 (N=227)	sig.
仕事に割く時間が少なくなったら	44.3%	16.7%	43.3%	20.3%	40.2%	17.6%	**
地域に受け皿となる施設があったら	23.4%	35.6%	26.2%	33.0%	37.2%	42.7%	**
地域に知り合いができたなら	12.3%	20.4%	11.2%	10.1%	8.1%	11.9%	**
地域住民が関わる仕組みができたなら	40.4%	43.1%	44.6%	52.9%	47.9%	57.7%	**
自分の子どもの学校と関わりができたなら	24.7%	27.3%	12.4%	16.3%	5.6%	4.0%	**
自分の能力が発揮できそうだったら	28.9%	26.4%	21.9%	26.4%	35.0%	30.0%	
何らかの形で割り当てや分担が決められたら	20.4%	24.5%	19.3%	26.4%	27.8%	32.6%	
どのような条件整備がなされても難しい	0.9%	1.4%	4.7%	2.2%	2.6%	2.2%	

\*\* p<.01

また、地域住民としてキャリア教育に参画するために必要な仕組みに関する性別年齢による回答傾向では、おおむね年齢が高くなるほど、また、女性よりは男性で回答が多かった。

「地域住民が互いに協力できるネットワークの仕組みを作ること」「自分が地域に対してどのように貢献できるか分かる仕組みを作ること」「地域のニーズが分かる仕組みを作ること」の各項目で高年齢層、男性を中心に回答が多く見られた。特に男性の中高年齢層で、地域に関わるための仕組みが求められていることが分かる。

その他、「若者だけでなく保護者も気楽に相談できる場所を設けること」では女性の回答が多く、なかでも30代女性で6割の回答があった。保護者のための相談施設に対するニーズの強さがうかがえる。また、「地域で若者を支援するための知識や技術を学べる場所を作ること」では50代、特に女性で回答が多かった。キャリア教育に関わりたいと考える地域住民の潜在的な人材としてこの年代層の女性を考えておくことができるだろう。

図表5-14 地域住民としてキャリア教育に参画するために必要な仕組みに関する  
性別年齢による回答傾向の違い

	30代 男性 (N=235)	30代 女性 (N=216)	40代 男性 (N=233)	40代 女性 (N=227)	50代 男性 (N=234)	50代 女性 (N=227)	sig.
若者だけでなく、保護者も気楽に相談できる場所を設けること	47.2%	59.7%	38.2%	44.5%	45.7%	54.6%	**
就職や進学に関する資料を図書館などで豊富に用意すること	11.1%	18.1%	10.3%	11.9%	9.0%	8.8%	
就職や進学に関する支援や相談を行う施設やセンターを設けること	25.1%	40.7%	29.2%	28.2%	31.2%	27.8%	
就職や進学に関する支援や相談を行う専門家を養成・配置すること	18.7%	25.0%	21.0%	20.3%	20.9%	18.9%	
地域で若者を支援するための知識や技術を学べる場所を作ること	22.1%	27.8%	27.9%	32.2%	34.2%	39.2%	**
地域住民が互いに協力できるネットワークの仕組みを作ること	44.3%	34.7%	43.8%	38.3%	53.0%	38.3%	**
地域に関わるためのコーディネートが行われる仕組みを作ること	14.9%	8.8%	16.3%	15.0%	18.4%	12.3%	**
自分が地域に対してどのように貢献できるか分かる仕組みを作ること	26.8%	19.4%	30.5%	22.0%	35.9%	33.0%	**
地域のニーズが分かる仕組みを作ること	16.2%	18.5%	18.5%	22.0%	26.5%	29.1%	**

\*\* p<.01

#### (4) 地域住民としてのキャリア教育への関与に影響を与える要因

地域住民としてのキャリア教育への関わりに関するここまでの分析結果のまとめの意味から、地域住民としてのキャリア教育への関わり（図表5-8参照）を被説明変数、保護者の性別、年齢、学歴、世帯年収、正社員か否か、子どもの属性（性別、学校段階）などの要因を説明変数とした重回帰分析を行った。

その結果、図表5-15のような結果が得られた。この結果から、父親よりは母親の方が地域住民としてのキャリア教育への関与が高く、子どもが小学生以下の場合も高いことが分かる。小学生段階の小さい子どもをもつ母親で特に地域住民としてキャリア教育に関わると考えていることが分かる。逆に、小学生段階の小さな子どもをもつ母親は、地域住民としてキャリア教育に参画するニーズ、また余裕があり、自らキャリア教育を提供する主体として期待できるという考え方もできるだろう。現在、各地でNPO法人等による様々な地域主体のキャリア教育・キャリアガイダンスの取り組みが行われているが、この段階の保護者層を中心とした取り組みを構想する可能性があるということが示される。

図表5-15 地域住民としてキャリア教育に参画するために必要な仕組みに関する  
性別年齢による回答傾向の違い

	地域の キャリア 教育に対 する関与
	B sig.
父親(対 母親)	-.16 **
年齢	.09 +
学歴	.06 +
年収	-.02
正社員(対 非正社員)	.08 +
子どもが男子	.03
子どもが女子	.00
子どもが小学生以下	.11 *
子どもが中学・高校	.04
子どもが大学生	.00
子どもが成人	-.03
定数	
	R <sup>2</sup> =0.011 (p<.01)

## (5)自由記述結果にみる地域住民の立場からみたキャリア教育

本調査では、地域住民の立場からのみたキャリア教育に関する自由記述部分もあったので、その回答結果を示す。

まず、地域の子どもの将来に向けた取り組みとして、何ができるかをたずねた質問では、自由記述部分に回答した約半数の保護者が「わからない」と回答し、具体的な取り組みのイメージは持ちにくいことが示された。ただし、一部、具体的な取り組みの内容について記述した保護者では、「地域の祭りや行事に参加してコミュニケーションの機会をつくる」「年配者との交流」「スポーツの指導」「レクリエーション活動の参加・指導」「地域・近隣でのボランティアを一緒にする」「読書や水泳指導のボランティア」といった回答が寄せられていた。「自治会と同じ取り組み」といった回答もあったように、従来からある地域の行事や交流、スポーツ・レクリエーション活動・ボランティアなどの地域活動の延長線上に、地域におけるキャリア教育を構想する可能性があることが分かる。

また、仮にどのような条件が整ったら地域におけるキャリア教育の活動に関わることができるかという質問に対する自由記述では、「自分の子の子育てが終わったら」「下の子の手がはなれたら」「自分の子どもが高校生くらいになれば」「子供が小さいので実質的にまだ無理なので」「子供の手が離れたら」「自分の子供が小さい為」「子育てに精一杯」の他、「親(私と主人の)4人に手がかからなくなったら」「現在、親の介護がある為」といった回答も多く、子育てや親の介護などの「家庭的条件が解決されれば」、地域のキャリア教育に関わることができるという回答が多かった。ただし、これらの回答のほとんどが女性からの回答であったことを考えると、むしろ女性では現在の家庭における諸制約が取り除かれれば参画できる可能性があるといった解釈ができるだろう。逆に、男性では、「職場が近くなったら」「会社の協力」といった回答がわずかにみられたのみであり、ほとんど可能性さえ考えられないといった現状も透かし見える。

最後に、これからの若者や子どものために、地域にどのような仕組みが必要かといった質問に対する自由記述では、「若者や子供に対して大人が気軽にしかりつけられる環境を作ること」「子供会町内会行事への積極的参加のための声掛けなど」「難しく考えず、声をかけたり、しかったり子どもと話すことだと思う」といった記述がみられた。声をかけたり、しかったりといった面も含めた地域の若者・子どもとのコミュニケーションの回復を求める声だと言えよう。ただし、基本的には、地域における取り組みという考え方には、悲観的な意見が多く、「いわゆる「地域」には必要ない」「地域には無理だと思う。ムダ!」「自治会があっても入会、そして参加する方が減ってきています。まず親が地域にかかわる事が大切でしょう。」「皆がとても忙しくて、あまり地域にいません」といった記述もみられた。地域におけるキャリア教育といったテーマを考えるにあたっては、キャリア教育以前に、そもそも地域社会そのものが直面している課題の解決が重要となってくる面がうかがえた。

## (6) 地域住民の立場からみたキャリア教育

地域住民の立場からみたキャリア教育に関する結果をまとめると、以下のとおりとなる。

①地域住民の立場からみたキャリア教育に対しては関わるができるとする回答が比較的多かったが、子どものキャリア教育以前に親どうしが地域社会で関わる機会・受け皿・仕組みが求められているようであった。②地域住民としての関わりは、性別によって大きく異なる。男性は具体的な職場を見せることで、職場の規範や職業観を身につけさせることが可能だと考えている反面、仕事に割く時間が多いために十分に関わるができないと感じていた。一方、女性は具体的な仕事の場面を見せることは難しいと感じながらも、親どうしが話し合うことで子どもに様々な人と接する機会を増やすことができると感じていた。③地域住民の立場からみたキャリア教育を支える潜在的な保護者層として、乳幼児期の子育てを終えた小学生段階の子どもをもつ母親に可能性があることが示された。この段階の保護者層が相互に関わりをもち、何らかの受け皿を作ることで、地域社会におけるキャリア教育を新たな形で構想できる可能性があることが示された。④ただし、自由記述結果では、厳しい意見が多く、地域住民の立場からみたキャリア教育には、今後も課題があることがうかがえた。